

む。家土産いえうらと(65)にしたるなるべし。その小袖の上に菊の枝置き添へつ。黒き人影あとさきに、駕籠ゆらくくと釣持ちたる、可惜あから(66)その露をこぼさずや、大輪おほりんの菊の雪なすに、月の光照り添ひて、山路やまじに白くちらくくと、見る目遥はるかに下り行きぬ。

見送り果てず引返して、駈かけ戻りて枝折戸入りたる、庵いばりのなかは暗かりき。

「唯今ただいま！」

と勢よく框かまちに踏懸かみかけ呼びたるに、答いっせはなく、衣きぬの氣勢けいはいして、白き手をつき、肩のあたり、衣紋えもんのあたり、乳ちのあたり、衝立ついでの蔭かげに、つと立ちて、烏羽玉うばたまの髪(67)のひまに、微笑ほほえみむかへし摩耶まがが顔。笈かぶの音して、叢くさむらに、虫鳴く一ツ聞えしが、われは思はず身の毛よだちぬ。

この虫の声、笈の音、框に片足かけたる、爾時そのとき、衝立の蔭に人見えたる、われは嘗かて恠かる時、かゝることに出会いであひぬ。母上か、摩耶なりしか、われ覚えて居らず。夢なりしか、知らず、前の世のことなりけむ。

三尺角さんじゃくかく

山には木樵唄、水には船唄、駅路には馬子の唄、渠等はこれを以て心を慰め、勞を休め、我が身を忘れて屈託なくその業に服するので、恰も時計が動く毎にセコンドが鳴るようなものであろう。またそれがために勢を増し、力を得ることは、戦に鯨波を挙げるに齊しい、曳々！と一斉に声を合わせるトタンに、故郷も、妻子も、死も、時間も、慾も、未練も忘れるのである。

同じ道理で、坂は照る照る鈴鹿は曇る<sup>(5)</sup>と、いい、裕遣りたや足袋添えて<sup>(6)</sup>と唱える場合には、いずれも疲を休めるのである、無益なものおもいを消すのである、寧ろ苦勞を紛らそうとするのである、憂を散じよう、恋を忘れよう、泣音を忍ぼうとするのである。それだから追分が何時でもあわれに感じらるる。つまる処、卑怯な、臆病な老人が念仏を唱えるのと大差はないので、語を換えて言えば、不残、節をつけた不平の独言であ

る。

船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中に、この木挽は唄を謡わなかつた。

その木挽の与吉は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る、黙って大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで礼拝する如く、上から挽きおろし、挽きおろす<sup>(10)</sup>。この度のは、一昨日の朝から懸った仕事で、ハヤその半を挽いた。丈四間半、小口三尺まわり四角な樟を真二つに割ろうとするので、与吉は十七の小腕だけでも、この業には長けて居た。

目鼻立ちの愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈に向顔巻、三尺帯を前で結んで、南の字を大きく染抜いた半被を着て居る、これは此処の大家の仕着<sup>(15)</sup>で、挽いてる樟もその持分。

未だ暑いから股引は穿かず、跣足で木屑の中<sup>(16)</sup>にいた膝、股、胸のあたりは色が白い。大柄だけれども肥つては居らぬ、ならば袴でも穿かして見たい。与吉が身体を入れようという家は、直間近で、一町ばかり行くと、袂に一本暴風雨で根返して横様になったまま、半は枯れて、半は青々とした、あわれな銀杏の矮樹がある、橋が一個。その渋色の橋を渡ると、岸から板を渡した船がある、板を渡つて、苦の中へ出入をするので、この船が与吉の住居。で干潮の時は見るも哀で、宛然洪水のあとの如く、何時棄てた世帯道

具やら、欠挿鉢が黒く沈んで、蓬のような水草は波の随意靡いて居る。この水草はまた年久しく、船の底、舷に搦み附いて、恰も巖に苔蒸したかのよう、与吉の家をしつかりと結えて放しそうにもしないが、大川から汐がさして来れば、岸に茂った柳の枝が水に潜り、泥だらけな笹の葉がびたびたと洗われて、底が見えなくなり、水草の隠れるに從うて、船が浮上ると、堤防の遠方にすくすくと立って白い煙を吐く此処彼処の富家の煙突が低くなつて、水底のその欠挿鉢、塵芥、襪襪切、釘の折などは不残形を消して、蒼い潮を満々と漑えた溜池の小波の上なる家は、掃除をするでもなしに美しい。

その時は船から陸へ渡した板が真直になる。これを渡つて、今朝は殆ど満潮だったから、与吉は柳の中で燧と旭がさす、黄金のような光線に、その罪のない顔を照らされて仕事に出た。

## 二

それから日一日おなじことをして働いて、黄昏かかると日が暮き、柳の葉が力なく低れて水が暗うなると汐が退く、船が沈んで、板が斜めになるのを渡つて家に帰るので。

留守には、年寄つた腰の立たない与吉の爺々が一人で寝て居るが、老後の病で次第に

弱るのであるから、急に容体の変るといふ憂慮はないけれども、与吉は雇われ先で昼飯をまかなわれては、小休の間に毎日一度ずつ、見舞に帰るのが例であつた。

「じゃあ行つて来るぜ、父爺。」

与平という親仁は、涅槃に入ったような形で、胴の間に寝ながら、仏造つた額を上げて、汗だらけだけれども目の涼しい、息子が地藏眉の、愛くるしい、若い顔を見て、嬉しそうに頷いて、

「晩にゃ又柳屋の豆腐にしてくんねえよ。」

「あい、」といつて苦を潜つて這うようにして船から出た、与吉はずつと立って板を渡つた。向うて筋違角から二軒目に小さな柳の樹が一本、その低い枝のしなやかに垂れた葉隠れに、一間口二枚の腰障子があつて、一枚には仮名、一枚には真名で豆腐と書いてある。柳の葉の翠を透かして、障子の紙は新しく白いが、秋が近いから、破れて煤けたのを貼替えたので、新規に出来た店ではない。柳屋は土地で老舗だけれども、手広く商をするのではなく、八九十軒もあるう百軒足らずのこの部落だけを花主にして、今代は喜藏という若い亭主が、自分で売りに廻るばかりであるから、商に出た留守の、昼過は森として、柳の蔭に腰障子が閉まつて居る、樹の下、店の前から入口へ懸けて、地

の窪んだ、泥濘を埋めるため、一面に貝殻が敷いてある、白いの、半分黒いの、薄紅、赤いのも交つて堆い。

隣屋はこの辺に棟を並ぶる木屋の大家で、軒、廂、屋根の上まで、葺と木材を積揃えた、真中を分けて、空高い長方形の透間から凡そ三十畳も敷けようという店の片端が見える、その木材の蔭になって、日の光もあからさまには射さず、薄暗い、冷々とした店前に、帳場格子を控えて、年配の番頭が唯一人帳合をしている。これが角屋敷で、折曲ると灰色をした道が一筋、電柱の著しく傾いたのが、前と後へ、別々に頭を掉つて奥深く立つて居る、鋼線が又半だるみをして、廂よりも低い処を、弱々と、斜めに、さもさも衰えた形で、永代の方から長く続いて居るが、図に描いて線を引くと、文明の程度が段々此方へ来るに従うて、屋根越に鈍ることが分るであろう。

単に電柱ばかりでない、鋼線ばかりでなく、橋の袂の銀杏の樹も、岸の柳も、豆腐屋の軒も、角家の塀も、それ等に限らず、あたりに見ゆるものは、門の柱も、石垣も、皆傾いて居る、傾いて居る、傾いて居るが尽く一様な向にではなく、或ものは南の方へ、或ものは北の方へ、また西の方へ、東の方へ、てんでんばらばらになって、この風の無い、天の晴れた、曇のない、水面のそよそよとした、静かな、穏かな日中に処して、猶

且つ暴風に揉まれ、揺らるる、その瞬間の趣あり。ものの色もすべて褪せて、その灰色に鼠をさした湿地も、草も、樹も、一部落を蔽包んだ夥多しい材木も、材木の中を見え透く溜池の水の色も、一切、喪服を着けたよう、果敢なく哀である。

### 三

界限の景色がそんなに沈鬱で、湿々として居るに従うて、住む者もまた高声ではものをいわない。歩行にも内端で、俯向き勝て、豆腐屋も、八百屋も黙つて通る。風俗も派手でない、女の好も濃厚ではない、髪飾も赤いものは少なく、皆心するともなく、風土の喪に服して居るのである。

元来岸の柳の根は、家々の根太よりも高いのであるから、破風の上で、切々に、蛙が鳴くのも、欄干の壊れた、板のはなればなれな、杭の抜けた三角形の橋の上に蘆が茂つて、虫がすだくのも、船虫が群がって往來を駆けまわるのも、工場の煙突の煙が遙かに見えるのも、洲崎へ通う車の音がかたまつて響くのも、二日おき三日置きに思出したように巡查が入るのも、けたたましく郵便脚夫が走込むのも、鳥が鳴くのも、皆何となく土地の末路を示す、滅亡の兆であるらしい。

けれども、減びるといつて、敢てこの部落が無くなるという意味ではない、衰えるという意味ではない、人と家とは榮えるので、進歩するので、繁昌するので、やがてその電柱は真直になり、鋼線は張を持ち、橋がペンキ塗になって、黒塀が煉瓦に換ると、蛙、船虫、そんなものは、不残石灰で殺されよう。即ち人と家とは、榮えるので、恣る景色の佛がなくなろうとする、その末路を示して、滅亡の兆を表わすので、詮ずるに、蛇は進んで衣を脱ぎ、蟬は榮えて殻を棄てる、人と家とが、皆他の光榮あり、便利あり、利益ある方面に向つて脱出した跡には、この地のかかる佛が、空蟬になり脱殻になつて了うのである。

敢て未来のことはいわず、現在既にその姿になつて居るのではないか、脱け出した或者は、鳴き、且つ飛び、或者は、走り、且つ食う、けれども衣を脱いで出た蛇は、残した殻より、必ずしも美しいものとはいわれない。

ああ、まほろしのなつかしい、空蟬のかような風土は、却つてうつくしいものを産するの、柳屋に艶麗な姿が見える。

与吉は父親に命ぜられて、心に留めて出たから、岸に上ると、思うともなしに豆腐屋に目を注いだ。

柳屋は浅間な住居、上框を背後にして、見通の四畳半の片端に、隣家で帳合をする番頭と同一あたりの、柱に凭れ、袖をば胸のあたりで引き合せて、浴衣の袂を折返して、寢床の上に坐つた際に搔卷を懸けて居る。背には綿の厚い、ふっくりした、豎縞のちやんちやんを着た、鬱金木綿の裏が見えて襟脚が雪のよう、艶気のない、赤熊のような、ばさばさした、余るほどあるのを天神に結つて、浅黄の角紋の手絡を弛う大きくかけたが、病氣であろう、弱々とした後姿。

見透の裏は小庭もなく、すぐ隣屋の物置で、此処にも葎々と材木が建重ねてあるから、薄暗い中に、鮮麗なその浅黄の手絡と片頬の白いのが、拭込んだ柱に映つて、ト見ると露草が咲いたよう、果敢なくも綺麗である。

与吉はよくも見ず、通りがかりに、

「今日は」と、声を掛けたが、フト引戻さるるようにして覗いて見た、心着くと、自分か挨拶したつもりの婦人はこの人ではない。

#### 四

「居ない。」と呟くが如くにいつて、そのまま通抜けようとする。

ト日があたって暖たかそうな、明い腰障子の内に、前刻から静かに水を掻廻す氣勢がして居たが、ばったりといつて、下駄の音。

「与吉さん、仕事にかい。」

と婀娜たる声、障子を開けて顔を出した、水色の唐縮緬を引裂いたままの襪、玉のよな腕もあらわに、蜘蛛の囀を絞った浴衣、帯は占めず、細紐の態で裾を端折つて、布の純白のを、短かく腰に掛けて甲斐甲斐しい。

菌を染めた、面長の、目鼻立はつきりとした、眉は落さぬ、束ね髪の中年増、喜蔵の女房で、お品という。

濡れた手を間近な柳の幹にかけて半身を出した、お品は与吉を見て微笑んだ。

土間是一片の日あたりで、盤台、桶、布巾など、ありつたけのもの皆濡れたのに、薄く陽炎のようなのが立籠めて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木の太桶の水の色は、薄ら蒼く、柳の影が映つて居る。

「晩方又来るんだ。」

お品は莞爾しながら、

「難有う存じます、」故と慇懃にいった。

つかつかと行懸けた与吉は、これを聞くと、あまり自分の素気なかつたのに気がついたか、小戻りして真顔で、眼を一ツ隣いて、

「ええ、毎度難有う存じます。」と、罪のない口の利きようである。

「ほほ、何をいつてるのさ。」

「何がよ。」

「だつてお前様はお客様じゃあないかね、お客様なら私ん処の旦那だね、ですから、あの、毎度難有う存じます。」と柳に手を絶つて半身を伸出したまま、胸と顔を斜めにして、与吉の顔を差覗く。

与吉は極の悪そうな趣で、

「お客様だつて、あの、私は木挽の小僧だもの。」

と手真似で見せた、与吉は両手を突出してぐつと引いた。

「こうやって、こう挽いてるんだぜ、木挽の小僧だぜ。お前様はおかみさんだろう、柳屋のおかみさんじゃねえか、それ見ねえ、此方でお辞儀をしなけりゃならないんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品は目を睜つて、

「まあ、勿体ないわねえ、私達に何のお前さん……」といいかけて、つくづく膽りながら、お品はずつと立つて、与吉に向い合い、その襷懸けの綺麗な腕を、両方大袈裟に振って見せた。

「こうやって威張つてお在よ。」

「威張らなくつたつて、何も、威張らなくつたつて構わないから、ちやんが魚を食つてくれると可いけれど、」と何と思つたか与吉はうつむいて悄れたのである。

「何うしたんだね、又余計に悪くなつたの。」と親切にも優しく眉を擧めて聞いた。

「余計に悪くなつて堪るもんか、この節あ心持が快方だつていうけれど、え、魚氣を食わねえじゃあ、身体が弱るつていうのに、父爺はね、腥いものに箸もつけねえで、豆腐でなくつちやあならねえつていうんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は出来まいか。」と思出したように唐突にいつた。

## 五

「おや、」

お品は与吉がいうことの余り突拍子なのを、笑うよりも先ず驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てくんねえ、出来そうなものだなあ。雁もどきつて、ほら、種々なものが入つた油揚げがあらあ、銀杏だの、椎茸だの、あれだ、あの中へ、え、肴を入れて交ぜツこにするてえことあ不可ねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いやね、聞いて見て置きましようよ。」

「ああ、聞いて見てくんねえ、真個に肴ッ氣が無くツちやあ、台なし身体(55)が弱るつていうんだもの。」

「何故父上は腥をお食りじゃあないのだね。」

与吉の真面目なのに釣込まれて、笑うことの出来なかつたお品は、到頭骨のある豆腐の注文を笑わずに聞き済ました、そして真顔で尋ねた。

「ええ、その何だつて、物をこそ言わねえけれど、目もあれば、口もある、それで生白い色をして、煮いものもあるがね、煮られて皿の中に横になつた姿でえものは、魚々と一口にやあいうけれど、考えて見りやあ生身をぐつぐつ煮着けたのだ、尾頭のあるものの死骸だと思つと、氣味が悪くつて食べられねえつて、左様いうんだ。

詰らねえことを父爺いふもんじゃあねえ、山の中の爺婆でも塩したのを食べるつてよ。煮たのが、心持が悪けりや、刺身にして食べないかつていうとね、身震をするんだぜ。

刺身ッていやあ一寸試だ、鱈(66)にすりゃぶつぶつ切か、あの又目口のついた天窓へ骨が繋(67)つて肉が絡(68)いついて残る凶なんてものは、と厭(69)な顔をするからね。ああ、「といつて与吉は領(70)いた。これは力を入れて相手にその意を得させようとしたのである。

「左様なんかねえ、年紀(71)の故(72)もあろう、一ツは気分だね、お前さん、そんなに厭(73)がるものを無理に食べさせない方が可(74)いよ、心持(75)を悪くすりゃ身体(76)のたしにもなんにもならないわねえ。」

「でも痩(77)せるようだから心配だもの。気が着かないようにして食べさせりゃ、胸(78)を悪くすることもなからうからなあ、いまの豆腐(79)の何よ。ソレ、」

「骨(80)のあるがんもどきかい、ほほほほほほ、」と笑つた、垢(81)抜けのした顔(82)に鉄漿(83)を含んで美しい。

片頬(84)に触れた柳の葉先を、お品はその艶(85)やかに黒い前歯(86)で銜(87)えて、扱(88)くようにして引断(89)つた。青い葉を、カチカチと二ツばかり嚙(90)んで手に取つて、掌(91)に載(92)せて見た。トタンに框(93)の取着(94)の柱(95)に凭(96)れた浅黄(97)の手絡(98)が此方(99)を見向(100)く、うら少(101)のと面(102)を合(103)わせた。

その時までは、殆ど自分で何をするかに心着(104)いて居(105)ないよう、無意識(106)の間(107)にして居たらしいが、フト目を留(108)めて、俯(109)向(110)いて、じつと見て、又梢(111)を仰(112)いで、

「与吉さんのいうようじゃあ、まあ、無(113)この葉も痛むこつたらうねえ。」

と微笑(114)んで見せて、少(115)いのがその清(116)い目に留(117)めると、くるりと廻(118)つて、空(119)さまに手を上げた、お品はすつと立つて、しなやかに柳の幹(120)を叩(121)いたので、蜘蛛(122)の巣(123)の乱れた薄(124)い色の浴衣(125)の袂(126)は、ひらひらと動(127)いた。

与吉は半被(128)の袖(129)を搔(130)合(131)わせて、立つて見て居たが、急に振返(132)つて、

「そうだ。じゃあ親方(133)に聞いて見ておくん。可(134)いかい、」

「ああ、可(135)いとも、」といつて向直(136)つて、お品は搔(137)潜(138)つて襷(139)を脱(140)した。斜(141)めに袈裟(142)になつて結目(143)がすらりと下(144)る。

「お邪魔(145)申しました。」

「あれだよ。又、」と、莞爾(146)していう。

「そうだつけな、うむ、此方(147)あお客(148)だぜ。」

与吉は独(149)で領(150)いたが、背向(151)になつて、肱(152)を張(153)つて、南(154)の字(155)の印(156)が動(157)く、半被(158)の袖(159)をぐツと引(160)いて、手を掉(161)つて、

「おかみさん、大威張(162)だ。」

「あばよ。」

## 六

「あい、」といいすてに、急足で、与吉は見る内に間近な洪色の橋の上を、黒い半被で渡った。真中頃で、向岸から駆けて来た郵便脚夫と行合つて、遣違いに一緒になったが、分れて橋の両端へ、脚夫はつかつかと間近に来て、与吉は彼の、倒れながらに半ば黄ばんだ銀杏の影に小さくなつた。

## 七

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗髪のお品は、手足の真黒な配達夫が、突当るように目の前に踏留まつて棒立になつて喚いたのに、驚いた顔をした。

「更科お柳さん、」

「手前どもでございます。」

お品は受取つて、青い状袋の上書をじつと見ながら、片手を垂れて前垂のさきを掴んで上げつつ、素足に穿いた黒緒の下駄を揃えて立つてたが、一寸齧りして、裏の名を読む

と、顔の色が動いて、横目に框をすかして、片頬に笑を含んで、堪らないといったような声で、

「柳ちゃん、来たよ！」というが疾いか、横ざまに駆けて入る、柳腰、下駄が脱げて、足の裏が美しい。

## 八

与吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直ぐそのまま材木の前に跪いて、鋸の柄に手を懸けた時、配達夫は、此処の前を横切つて、身を斜に、波に揺られて流るるような足取で、走り去つた。

与吉は見も遣らず、傍目も触らないで挽きはじめる。

巨大なるこの樟を濡らさないために、板屋根を葺いた、小屋の高さは十丈もあるう、脚の着いた台に寄せかけたのが突立つて、殆ど屋根裏に届くばかり。この根際に膝をついて、伸上つては挽き下ろし、伸上つては挽き下ろす、大鋸の齒は上下にあらわれて、両手をかけた与吉の姿は、鋸よりも小さいかのよう。

小屋の中には単こればかりでなく、両傍に堆く偉大な材木を積んであるが、その嵩は

与吉の丈より高いので、纜に鋸屑の降積つた上に、小さな身体一ツ入れるより他に余地はない。で恰も材木の穴の底に跪いてるに過ぎないのである。

背後は突抜きの岸で、ここにも地と一面な水が蒼く澄んで、ひたひたと小波の敵が絶えず間近う来る。往来傍には又岸に臨んで、果しなく組違えた材木が並べてあるが、二十三十ずつ、四ツ目形に、井筒形に、規律正しく、一定した距離を置いて、何処までも続いて居る、四ツ目の間を、井筒の彼方を、見え隠れに、ちらほら人が通るが、皆黙つて歩行して居るので。

淋しい、森とした中に手拍子が揃つて、コツコツコツコツと、鉄槌の音のするのは、この小屋に並んだ、一棟、同一材木納屋の中で、三個の石屋が、石を繋るのである。

板囲をして、横に長い、屋根の低い、湿つた暗い中で、働いて居るので、三人の石屋も齊しく南屋に雇われて居るのだけれども、渠等は与吉のようなのではない、大工と一所に、南屋の普請に懸つて居るので、ちよつと与吉の小屋と往来を隔てた真向うに、小さな普請小屋が、真新しい、節穴だらけな、薄板で建つて居る、三方が囲つたばかり、編んで繫いだ縄も見え、一杯の日当で、いきなり土の上へ白木の卓子を一脚据えた、その上には大土瓶が一個、茶吞茶碗が七個八個。

後に置いた腰掛台の上に、一人は匍匐になつて、肘を張つて長々と伸び、一人は横ざまに手枕して股引穿いた脚を屈めて、天窓をくつつけ合つて大工が寝そべて居る。普請小屋と、花崗石の門柱を並べて扉が左右に開いて居る、門の内の横手の格子の前に、萌黄に塗つた中に南と白で抜いたポンプが据つて、その縁に釣棒と畚とがぶらりと懸つて居る、真にも静かな、大家の店前に人の氣勢もない。裏庭とおもうあたり、遙か奥の方には、葉のやや枯れかかった葡萄棚が、影を倒にうつして、此処もおなじ溜池で、門のあたりから間近な橋へかけて、透間もなく乱杭を打つて、数限もない材木を水のままに浸してあるが、彼処へ五本、此処へ六本、流寄つた形が判で印した如く、皆三方から三ツに固つて、水を三角形に区切つた、あたりは広く、一面に早苗田のようである。この上を、時々ばらばらと雀が低う。

## 九

その他に此処で動いてるものは与吉が鋸に過ぎなかつた。余り静かだから、しばらくして、又しばらくして、樟を挽く毎にぼろぼろと落つる木屑が判然聞える。

(父親は何故魚を食べないのだろう)とおもいながら膝をついて、伸上つて、鋸を手元<sup>ひざもと</sup>に引いた。木屑は極めて細かく、極めて軽く、材木の一処<sup>ひとところ</sup>から湧くようになって、肩にも胸にも膝の上にも降りかかる。トタンに向うさまに突出して腰を浮かした、鋸の音につれて、又時雨のような微な響<sup>かすかひびき</sup>が、寂寞とした巨材の一方から聞えた。

柄を握つて、挽きおろして、与吉は呼吸をついた。

(左様だ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がったまま、皿の中に残るのだ、)

と思ひながら、絶えず拍子にかかつて、伸縮に身体<sup>ひらちみからだ</sup>の調子を取つて、手を働かす、鋸が上下して、木屑がまた溢れて来る。

(何故だろう、これは鋸で挽く所<sup>せい</sup>だ)と考えて、柳の葉が痛むといったお品の言<sup>ことば</sup>が胸に浮ぶと、又木屑が胸にかかつて。

与吉は薄暗い中に居る、材木と、材木を積上げた周囲は、杉の香、松の匂<sup>におい</sup>に包まれた穴の底で、目を睜つて、跪いて、鋸を握つて、空<sup>そら</sup>まに仰いで見た。

樟の材木は斜めに立つて、屋根裏を漏れてちらちらする日光に映つて、言うべからざる森厳な趣がある。この見上ぐるばかりな、これほどの丈のある樹はこの辺<sup>あたり</sup>でついぞ見た事はない、橋の袂の銀杏は固より、岸の柳は皆短い、土手の松はいうまでもない、遙

に見えるその梢は殆ど水面と並んで居る。

然も猶これは真直に真四角に切たもので、およそ恁る角の材木を得ようというには、<sup>(80)</sup> 柚が八人五日あまりも懸らねばならぬと聞く。

那な大木のあるのは蓋し深山であろう、幽谷でなければならぬ。殊にこれは飛驒山<sup>ひだま</sup>から廻して来たのであることを聞いて居た。

枝は蔓つて、谷に亘り、葉は茂つて峰を蔽い、根はただ一山を絡つて居たろう。

その時は、その下蔭は矢張こんな暗かつたか、蒼空に日の照る時も、と然う思つて、根際に居た黒い半被を被た、可愛い顔の、小さな蟻のようなものが、偉大なる材木を仰いだ時は、手足を縮めてぞつとしたが、

(父親は何うしてるだろう)と考えついた。

鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は弥六親仁がいつもの通、筏を流して来て、あの、船の傍を漕いで通りますぐりに、父上に声をかけてくれる時分だ、)

と思わず振向いて池の方、うしろの水を見返つた。

溜池の真中あたりを、頼冠した、色のあせた半被を着た、脊の低い親仁が、腰を曲げ、

足を突張つて、長い棹を繰つて、画の如く漕いで来る、筏は恰も人を乗せて、油の上を渡るよう。

するすると向うへ流れて、横ざまに近づいた、細い黒い毛脛を掠めて、蒼い水の上を鷗が弓形に大きく鮮かに飛んだ。

## 十

「与太坊、父爺は何事もねえよ。」と、池の真中から声を懸けて、おやじは小屋の中を覗こうともせず、爪さきは小波を浴ぶるばかり沈んだ筏を棹さして、この時また中空から白い翼を飜して、ひらひらと落ちて来て、水に姿を宿したと思うと、向うへ飛んで、鷗の去つた方へ、すらすらと流して行く。

これは弥六といつて、与吉の父翁が年来の友達で、孝行な児が仕事をしながら、病人を案じて居るのを知つて居るから、例として毎日今時分通りがかりにその消息を伝えるのである。与吉は安堵して又仕事にかかった。

(父親は何事もないが、何故魚を喰べないのだろう。左様だ、刺身は一寸だめしで、鱈はぶつぶつ切だ、魚の煮たのは、食べると肉がからみついたまま頭に繋つて、骨が残

る、彼の血の中の死骸に何うして箸がつけれようといつて身震をする、まったくだ。そして魚ばかりではない、柳の葉も食切ると痛むのだ。)と思ひ、又この偉大なる樟の殆ど神聖に感じらるるばかりな巨材を仰ぐ。

高い屋根は、森閑として日中薄暗い中に、ほのぼのと見える材木から又ばらばらと、ばらばらと、其処ともなく、鋸の屑が溢れて落ちるのを、思わず耳を澄まして聞いた。中央の木目から渦いて出るのが、池の小波のひたひたと寄する音の中に、隣の納屋の石を切る響に交つて、繁つた葉と葉が擦合うよううで、たとえば時雨の降るよううで、又無数の山蟻が谷の中を歩行く蹠音のよううである。

与吉はとみこうみて、肩のあたり、胸のあたり、膝の上、跪いてる足の間に落溜つた、堆い、木屑の積つたのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今までその上について暖だつた膝頭が冷々とする、身体が濡れはせぬかと疑つて、彼処此処袖襟を手で拵いて見た。仕事最中、こんな心持のしたことは始めてである。

与吉は、一人谷のドン底に居るよううで、心細くなつたから、見透かす如く日の光を仰いだ。薄い光線が屋根板の合目から洩れて、幽かに樟に映つたが、巨大なるこの材木は唯単に三尺角のみものではなかつた。

与吉は天日を蔽う、葉の茂った五抱もあろうという幹に注連縄を張った樟の大樹の根に、恰も山の端と思う処に、シツきりなく降りかかる翠の葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あたりは真暗な処に、虫よりも小な身体で、この大木の恰もその注連縄の下あたりに鋸を突きして居るのに心着いて、恍惚として目を睜ったが、気が遠くなるようだから、鋸を抜こうとすると、支えて、堅く食入つて、微かにも動かぬので、はッと思うと、谷々、峰々、一陣轟！と渡る風の音に吃驚して、数千仞の谷底へ、真倒に落ちたと思つて、小屋の中から転がり出した。

「大変だ、大変だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙声で、枕も上らぬ寢床の上の露草の、がツくりとして仰向けの淋い素顔に紅を含んだ、白い頬に、蒼みのさした、うつくしい、妹の、ばさはさした天神鬘の崩れたのに、浅黄の手絡が解けかかつて、透通るように真白で細い頸を、膝の上に抱いて、抱占めながら、頬摺していった。お品が片手にはしつかりと前刻の手紙を握つて居る。

「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん——柳ちゃん——しつかりおし。お手紙にも、そこらの材木に枝葉がさかえるようなことがあつたら、夫婦に成つて遣るッて書い

てあるじゃあないか。

親の為だつて、何だつて、一旦他の人に身をお任せだもの、道理だよ。お前、お前、それで気を落したんだけれど、命をかけて願つたものを、お前、それまでに思うものを、柳ちゃん、何だつてお見捨てなさるものかね、解つたかい、あれ、あれをお聞きよ。もう可いよ。大丈夫だよ。願は叶つたよ。」

「大変だ、大変だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂った、大変だ、枝が出来た。」

と普請小屋、材木納屋の前で叫び足らず、与吉は狂気の如く大声で、この家の前をも呼わつて歩いたのである。

「ね、ね、柳ちゃん——柳ちゃん——」

うつとりと、目を開いて、ハヤ色の褪せた唇に微笑んで頷いた。人に血を吸われたあわれな者の、将に死なんとする耳に、与吉は福音を伝えたのである、この与吉のようなものでなければ、実際また恠る福音は伝えられなかつたのであろう。

木精(二尺角拾遺)

木精(二尺角拾遺)

Faint vertical text columns on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

Faint vertical text columns on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

「あなた、冷えやしませんか。」

お柳は暗夜の中に悄然と立って、池に臨んで、その肩を並べたのである。工学士は、井桁に組んだ材木の下なる端へ、窮屈に腰を懸けたが、口元に近々と吸った巻煙草が燃えて、その若々しい横顔と帽子の鍰広な裏とを照らした。

お柳は男の背に手をのせて、弱いものいいながら遠慮気なく、

「あら、しつとりしてるわ、夜露が酷いんだよ。直にそんなものに腰を掛けて、あなた冷いでしょ。真とに養生深い方が、それに御病氣挙句だというし、悪いわねえ。」  
 と言つて、そつと圧えるようにして、

「何ともありませんか、又ぶり返すと不可ませんわ、金さん。」

それでも、ものをいわなかつた。

「真とに毒ですよ、冷えると悪いから立っていらつしやい、立っていらつしやいよ。その方が増ですよ。」

といひかけて、あどけない声で幽に笑つた。

「ほほほ、遠い処を引張つて来て、草臥れたでしょう。済みませんねえ。あなたも厭だというし、それに私も、そりや様子を知つて居て、一所に苦勞をして呉れたからつたつても、姉さんには極が悪くつて、内へお連れ申すわけには行かないし。我儘ばかり、お寝つて在らつしやつたのを、こんな処まで連れて来て置いて、坐つてお休みなさることさえ出来ないんだよ。」

お柳はいいかけて涙ぐんだようだったが、しばらくすると、

「さあ、これでもお敷きなさい、些少はたしになりますよ。さあ、」

擦寄つた氣勢である。

「袖か、」

「お厭？」

「そんな事を、しなくつても可い。」

「可かありませんよ、冷えるもの。」

「可いよ。」

「あれ、情が強いねえ、さあ、ええ、ま、痩せてる癖に。」と向うへ突いた、男の身が浮いた下へ、片袖を敷かせると、まくれた白い腕を、膝に縋つて、お柳は物と呼吸。

男はじつとして動かず、二人ともしばらく黙然<sup>だんぜん</sup>。

やがてお柳の手がしなやかに曲<sup>まが</sup>って、男の手に触<sup>ふ</sup>れると、胸のあたりに持つて居た巻煙草は、心するともなく、放<sup>はな</sup>れて、婦人<sup>おんな</sup>に渡<sup>わた</sup>った。

「もう私は死ぬ処<sup>しよ</sup>だつたの。又笑<sup>わら</sup>うでしようけれども、七日ばかり何にも塩<sup>しお</sup>ツ氣<sup>け</sup>のものはないんですもの、斯<sup>か</sup>うやってお目に懸<sup>か</sup>りたいと思<sup>おも</sup>つて、煙草も断<sup>た</sup>つて居<sup>い</sup>たんですよ。何だつて一旦汚<sup>いつたんげが</sup>した身体<sup>からだ</sup>ですから、そりやおつしやらないでも、私<sup>わたし</sup>の方<sup>かた</sup>で氣<sup>き</sup>が怯<sup>ひ</sup>けます。それにあなたも旧<sup>もと</sup>と違<sup>ちが</sup>つて、今<sup>いま</sup>のような御身<sup>おみ</sup>分<sup>ぶん</sup>でしよう、所詮<sup>しよせん</sup>叶<sup>な</sup>わないと断<sup>あきら</sup>めても、断<sup>あきら</sup>められないもんですから、あなた笑<sup>わら</sup>つちや厭<sup>いと</sup>ですよ。」

といい淀<sup>よど</sup>んで一寸男<sup>いちよん</sup>の顔<sup>かほ</sup>。

「断<sup>あきら</sup>めのつくように、断<sup>あきら</sup>めさして下さいッて、お願い申<sup>ま</sup>した、あの、お返<sup>かえ</sup>事を、夜<sup>よ</sup>の目<sup>め</sup>も寝<sup>ね</sup>ないで待<sup>まち</sup>つてますと、前刻<sup>まへこく</sup>下<sup>くだ</sup>すつたのが、あれ……ね。

深川<sup>ふかがわ</sup>のこの木場<sup>きば</sup>の材木<sup>まき</sup>に葉<sup>は</sup>が繁<sup>さか</sup>つたら、夫婦<sup>いっしよ</sup>になつて遣<sup>や</sup>るッておつしやつたのね。何<sup>なに</sup>うしたつて出来<sup>でき</sup>そうもないことが出来<sup>でき</sup>たのは、私<sup>わたし</sup>の念<sup>ねん</sup>が届<sup>き</sup>いたんですよ。あなた、こんなに思<sup>おも</sup>うもの、その位<sup>くらい</sup>なことはありますよ。」

と猶<sup>なほ</sup>しめやかに、

「ですから、無<sup>も</sup>う大威張<sup>おおいはり</sup>。それでなくツてはお声<sup>こゑ</sup>だつて聞<sup>き</sup>くことの出来<sup>でき</sup>ないのが、押<sup>おし</sup>懸<sup>か</sup>けて行<sup>い</sup>つて、無<sup>も</sup>理<sup>り</sup>にその材木<sup>まき</sup>に葉<sup>は</sup>の繁<sup>さか</sup>つた処<sup>ところ</sup>をお目に懸<sup>か</sup>けようと思<sup>おも</sup>つて連出<sup>つれだ</sup>して来たんです。

あなた分<sup>ぶん</sup>つたでしよう、今<sup>いま</sup>あの木挽<sup>こびき</sup>小屋<sup>こや</sup>の前<sup>まえ</sup>を通<sup>とお</sup>つて見<sup>み</sup>たでしよう。疑<sup>うたが</sup>うもんじゃありませんよ。人<sup>ひと</sup>の思<sup>おも</sup>ひですわ、真暗<sup>まくら</sup>だから分<sup>ぶん</sup>らないつてお疑<sup>うたが</sup>なざるのは、そりや、あなたが邪慳<sup>じやけん</sup>だから、邪慳<sup>じやけん</sup>な方にや分<sup>ぶん</sup>りません。」

又黙<sup>また</sup>つて俯向<sup>うつむ</sup>いた、しばらくすると顔<sup>かほ</sup>を上げて斜<sup>かた</sup>めに巻煙草<sup>まきせんそう</sup>を差寄<sup>さしよ</sup>せて、

「あい。」

「……………」

「さあ、」

「……………」

「邪慳<sup>じやけん</sup>だねえ。」

「……………」

「ええ！、要<sup>よ</sup>らなきや止<sup>と</sup>せ。」

というが疾<sup>はや</sup>いか、ケンドン<sup>(5)</sup>に投<sup>ほう</sup>り出<sup>だ</sup>した、巻煙草<sup>まきせんそう</sup>の火<sup>ひ</sup>は、ツツツと楕<sup>だ</sup>円<sup>えん</sup>形<sup>けい</sup>に長<sup>なが</sup>く中<sup>なか</sup>空<sup>から</sup>

に流星の如き尾を引いたが、燦と火花が散って、蒼くして黒き水の上へ乱れて落ちた。  
屹と見て、

「お柳、」

「え、」

「およそ世の中にお前位なことを、私にするものはない。」

と重々しく且つ沈んだ調子で、男は肅然としていった。

「女房ですから、」

と立派に言い放ち、お柳は忽ち震いつくように、岸破と男の膝に頬をつけたが、消入りそうな風采で、

「そして同年紀だもの。」

男はその頸を抱こうとしたが、フト目を反らす水の面、一点の火は未だ消えないで残つて居たので。驚いて、じつと見れば、お柳が投げた巻煙草のそれではなく、霏か、霧か、朦朧とした、灰色の溜池に、色も稍濃く、筏が見えて、天窓の円い小な形が一個乗つて蹲んで居たが、煙管を啣えたりうと思われる、火の光が、ぼつちり。

又水の上を歩行いて来たものがある。が船に居るでもなく、裾が水について居るでも

ない。脊高く、霧と同鼠の薄い法衣のようなものを絡つて、向の岸からひらひらと。

見る間に水を離れて、すれ違つて、背後なる木納屋に立てかけた数百本の材木の中に消えた、トタンに認めたのは、緑青で塗つたような面、目の光る、口の尖つた、手足は枯木のような異人であつた。

「お柳。」と呼ぼうとしたけれども、工学士は余りのことに声が出なくツて瞳を据えた。爾時何事とも知れず仄かにあかりがさし、池を隔てた、堤防の上の、松と松との間に、すつと立つたのが婦人の形、ト思うと細長い手を出し、此方の岸を気だるげに指招く。

学士が堪まりかねて立とうとする足許に、船が横ざまに、ひたといつて居た、爪先の乗るほどの処にあつたのを、霧が深い所為で知らなかつたのであらう、単そればかりでない。

船の胴の室に嬰児が一人、黄色い裏をつけた、紅の四ツ身を着たのが之つて、彼の婦人の招くにつれて、船ごと引きつけらるるように、水の上をするすると斜めに行く。

その道筋に、夥しく沈めたる材木は、恰も手を以て掻き退ける如くに、算を乱して颯と左右に分れたのである。

それが向う岸へ着いたと思うと、四辺また濛々、空の色が少し赤味を帯びて、殊に黒

ずんだ水面に、五六人の氣勢がする、囁くのが聞えた。

「お柳、」と思わず抱占めた時は、浅黄の手絡と、雪なす頸が、鮮やかに、狹霧の中に描かれたが、見る見る、色があせて、薄くなつて、ぼんやりして、一体に墨のようになって、やがて、幻は手にも留らず。

放して退ると、別に塀際に、犇々と材木の筋が立つて並ぶ中に、朧々ともこのそあれ、

学士は自分の影だろうと思つたが、月は無し、且つ我が足は地に釘づけになつてゐるのに、も係らず、影法師は、薄くなり、濃くなり、濃くなり、薄くなり、ふらふら動くから我にもあらず、

「お柳、」

思わず又、

「お柳、」

といつてすたすたと十問ばかりあとを追つた。

「待て。」

あでやかな顔は目前に歴々と見えて、ニツと笑う涼い目の、うるんだ露も手に取るばかり、手を取ろうする、と何にもない。掌に障つたのは寒い旭の光線で、夜はほのぼの

と明けたのであつた。

学士は昨夜、礫川なるその邸で、確に寢床に入ったことを知つて、あとは恰も夢のよう。今を現とも覚えず。唯見れば池のふちななる濡れ土を、五六寸離れて立つ霧の中に、唱名の声、鈴の音、深川木場のお柳が姉の門に紛れはない。然も面を打つ一脈の線香の香に、学士はハツと我に返つた。何も彼も忘れ果てて、狂気の如く、その家を音信れて聞くと、お柳は丁ど爾時……あわれ、草木も、婦人も、靈魂に姿があるのか。

- (139) 撓め たわませて。力を入れて曲げて。  
 (140) 天狗風 突然吹き下ろすつむじ風。  
 (141) 鏘然 玉や金属の鳴り響く音。  
 (142) 縷無き雪の膚 衣服を身につけない、雪のように白い肌。  
 (143) 羅綾 羅と綾織の意で、高級な着物のこと。  
 (144) 高麗べり 白地の綾に雲形や菊花などの紋を黒く織り出した萱の縁。  
 (145) 奉行 命を受けて務めること。  
 (146) 丑の時参詣 丑の時(現在の午前二時頃)に女が秘かに神社に参詣し、嫉妬や怨みの対象である男をかたどった薬人形を神木に釘で打ち込むことを七晩行うと、その男が呪い殺されると信じられた習俗。

## 解説

松村友視

本書には、明治三十年の「化鳥」から大正七年の「茸の舞姫」まで、八篇の短篇を収めた。

泉鏡花の作品史に位置づければ初期から中期の約二十年にわたるこれらの短篇は、題材や時代背景、作品の舞台など、それぞれに異なる相貌をもっている。

その一方で、相互に響き合う要素も少なくない。その要素はさまざまだが、少なくとも八篇いずれにも共通するのは、濃淡の差はあれ、どこかに幻想のモチーフをふくんでいる点である。

「私は思うに、(……)この現世以外に、一つの別世界というようなものがあって、其<sup>こ</sup>処には例の魔だの天狗などというのが居る」「一寸怪」といい、「僕は明かに世に二つの大なる超自然力のあることを信ずる。これを強いて一纏めに命名すると、一を観音力、

一を鬼神力とでも呼ぼうか(「おばけずきのいわれ少々と処女作」と語るように、鏡花にとつての真の世界像は、「現世」と「別世界」とが境を接して並立する光景である。その意味で「幻想」は、恣ほしいな想像力が生み出す虚妄ではなく、現実とは異なる論理の支配するもうひとつの實在ほんまにほかならない。鏡花文学は、これら二つの世界が互いに反映し合う合わせ鏡でもある。

ただし、しばしば言われるように、鏡花が非合理的な迷信を信じる前近代的な心性のうちにあったことをそれは意味しない。真の問題は恐らくその先にある。すなわち、「もうひとつの實在」の内実への問いとしてである。

\*

「化鳥(明治三十年四月)の舞台に想定されているのは、作中に明示はされないが、金沢の鏡花生家近くを流れる浅野川や、生家からは対岸に位置する卯辰山周辺の風景である。鏡花九歳の折に喪むなつた母が卯辰山上に葬られたという事実をひとつ取つても、鏡花文学の源流ともいふべきその風景は、実景とは異なる意味をもって鏡花の目に映じていたはずである。

「化鳥」の語り手である少年・廉が外の世界に投げかけるまなざしに映るのも日常の実景そのものではない。だが、少年の語りは一方で「実景」の本質を鮮明に浮き彫りにしてもいる。すなわち、「修身」の時間に女教師が「人は何なんだから、世の中に一番らしい」「人間が、鳥けだものや獣けだものよりえらい」と語る進化論的で人間中心主義的な世界像である。

それが学校教育を通じて近代国家が国民に与えようとしたまなざしであることを考えれば、これと真つ向から対峙し、「人間も、鳥けだものも草木も、昆虫ちゅうぶつ類も、皆形みななまこそ変かわつて居てもおんなじほどのものだ」と語る少年の視線は、ほとんど反時代的、反社会的な意味を帯びることになる。

少年にそのまなざしを与える契機になった母親の耐えがたい苦しみを、少年は「人に踏まれたり、蹴けられたり、後足かあしで砂をかけられたり、苛められて責さいまれて、煮湯にやみを飲ませられて……」と口を極めて語っている。だが、その苦しみの内実を少年は了解しているわけではない。「聞いても身震みふるがするような、そういう酷むごいめに、苦しい、痛い、苦ししい、辛い、惨酷ざんこくなめに逢あつて、そうしてようようお分りになったのを、すっかり私に教えて下さったので」というように、母親が痛苦の果てに至り着いた世界観を、自身はその経験を経ないまま、少年は母の教育によって獲得しているのである。ある意味で純

粹なその世界観は、やがて少年自身を鳥に化す幻想の中に包み込むことになる。

しかし、少年の一人称の語りの中に周到に書き込まれた物語時間の重層は、少年の知らない母の受苦の意味を示唆的に語ってもいる。

廉少年が小学校に通っている物語の現在がすでに「私の小さな時分」という過去の出來事とされているが、梅林や桃谷などの「花園」が存在していたのは、それよりさらに「八九年前」、少年が「まだ母様のお腹おなか中に小さくくなって居た時分」である。その当時のことを語る母親の回想を受けて少年は、「朱塗しゆぬりの欄干らんかんのついた二階の窓から」頬白や目白や山雀やまがらを「可愛らしい、うつくしい」ものとして眺めていた母親の姿を描き出す。橋銭を払わずに行こうとする俗物紳士の名刺の肩書きなどから、物語の現在は明治二十年前後と推定されるが、これを前提にすれば、「花園」の喪失を伴う母の受苦は明治十年代初頭の出來事と考えられる。明治十年のE・モースによる東京大学での進化論講義が我が国への進化論導入の端緒になったように、それは近代日本の成立という急激なパラダイム転換の起こった時代である。

つまり「花園」の喪失は近代社会の成立と正確に重なっており、少年自身にとっては胎内からの出生がこれに重なる。母親と少年が近代的な世界観を根底から否定し、同時に代の人々に否定的な視線を向ける理由がそこにある。母と子が見ているのは、失われた「花園」の風景の陰画かげがにほかならない。人間を動植物に読み替える母子の視線は、三年後に書かれる「高野聖」〔明治三十三年二月〕で、飛驒山中に迷い込んだ男たちを動物に変える孤家ひびとの女に引き継がれることになるだろう。

仮橋の番小屋の窓から「市」まちに向けて投げかけられる母子のまなざしは、「幻想」が、同時代の世界像とは本質を異にする明晰な「認識」であることを際まわやかに語っている。「もうひとつの実在」とは、そうした「認識」がとらえた風景である。

「化鳥」の三カ月後に書かれた「清心庵」〔明治三十年七月〕で摩耶と千が隠れ棲む「庵」にも、卯辰山の山腹が想定されている。

世間から離れ、山中の庵に二人だけの世界を形作っている摩耶と千の姿は「化鳥」の母子を思わせるが、母と子の間にも認識の足場に差があったように、摩耶と千の間にも落差がある。婚家から摩耶を連れ戻しにやってきたお蘭に対して「私に分つてるから、可いいから、お前たちは帰つておしまひ、可いいから、分つて居るのだから」と語る摩耶と、「摩耶さんが知つておいでだよ、私は何にも分らないんだ」という千との認識の落差である。

明治十三年に成立した刑法が姦通罪を重禁固に相当する重罪として認めていたことを思えば、大家の人妻と青年との隠棲が社会的に負う意味は決して軽くないはずだが、「分らない」という言葉を繰り返す十八歳の千の、性的関係の意味をさえ解さない幼児性は、そうした社会規範を根源的に拒否するコードでもある。

ただし、「清心庵」には摩耶と千の領分を越えるもう一つの認識のレベルが存在する。千との会話の末、お蘭は、「私たちの心とは何かまるで変つてるやうで、お言葉は腑に落ちないけれど」「何だか私も茫乎したやうで、気が変になつたやうで、分らないけれど」といつつも、ひとまずの了解を示して帰って行く。このときお蘭が臆げに見出していたのは、婚姻や家制度をはじめとする「市」や「世間」の規範とは明確に一線を画する山中の論理である。そのお蘭の了解を背後から支えるのが、清心尼に対する無条件の畏敬であり、より広くいえば、摩耶と千の世界を保証する宗教的な認識である。清心尼が庵を明け渡して行脚に出るのは、自分の発した言葉をきっかけに身を投げた千の母をめぐる贖罪のためばかりではない。

鏡花が釈迦の母・摩耶夫人に亡き母の佛を重ねて信仰していたことは広く知られている。この物語でも、お蘭の言葉の中で、合巻「釈迦八相倭文庫」を下敷きに摩耶と摩耶夫人が重ね合わされる。「化鳥」に登場する「翼の生えた美しい姉さん」は「釈迦八相倭文庫」の鬼子母神説話に出る青鸚という鳥のイメージに基づくという指摘(吉田昌志「泉鏡花と草双紙——「釈迦八相倭文庫」を中心として」昭和六十二年三月「文学」を踏まえれば、母の代償ともいふべき摩耶には「化鳥」の「美しい姉さん」の佛が重なるかもしれない。

「幼い頃の記憶」(明治四十五年五月)という短い随筆がある。そこで、幼時に母と船に乗った折に見た淋しげな「若い美しい女」のことを原風景のように語った鏡花は、その後の記憶をこう綴る。

十二三の時分、同じような秋の夕暮、外口の所で、外の子供と一緒に遊んで居ると、偶と遠い昔に見た夢のような、その時の記憶を喚び起した。(……)

夢に見たのか、生れぬ前に見たのか、或は本当に見たのか、若し、人間に前世の約束と云うようなことがあり、仏説などに云う深い因縁があるものなれば、私は、その女と切るに切り難い何等かの因縁の下に生れて来たような気がする。

「清心庵」末尾的印象的なたそがれの光景に、この記憶は確実につながっている。

前世と現世が連続し、亡き母と摩耶とが重層し、千の個性さえも解体してしまうよう

なたそがれの風景は、「化鳥」の少年が鳥に化すたそがれの梅林の幻想とも通じている。

\*

「三尺角」明治三十二年一月は、一転、東京の深川を舞台にした、世話物芝居を思わせるような作品である。しかし、「幻想」の水脈はここにも奥深く通っている。

永井荷風は明治四十二年の「深川の唄」で、深川に江戸の名残を見出した。その十年前、鏡花は同じ深川に滅びの風景を読み取っている。「図に描いて線を引くと、文明の程度が段々此方へ来るに従うて、屋根越に鈍ることが分るであろう」というように、滅びとは、永代橋の対岸から押し寄せてくる近代化による発展の影で息絶えていく風景の姿である。「一切、喪服を着けたようで、果敢なく哀」なその風景の中で、堀に繋いだ小舟の中に死にゆく体を横たえる与平や、豆腐屋の奥に最後の命をつないでいるお柳は、滅びゆく土地の命運を自ら担っているといつてよい。

その与平は、息子の与吉の氣遣いにもかかわらず、魚を口にしない。「刺身ッていやあ一寸試だ、鱈にすりやぶつぶつ切か」というように、与平は、「物をこそ言わねえけれど、目もあれば、口もある」魚の中に人間と同質の死を——いいかえれば同質の命を

——読み取ってしまうために、食べることができないのである。与吉の言葉を通して無意識のうちにその意味に思いつたお品は、たまたま噛んだ柳の葉に妹のお柳の姿を重ね、「与吉さんのいうようじゃあ、まあ、嗚この葉も痛むこッたるうねえ」とつぶやく。

静けさの中でひたすら樟を挽く与吉の内部で、それらの何気ない言葉が反芻されて共鳴し、魚と柳と人が一つの命の回路でつながれたとき、与吉の幻想はにわかに発動する。大鋸から渦巻いてこぼれ落ちる樟の木屑が山蟻の歩く音に聞こえ、樟の血となって膝を濡らす。やがて、巨大な樟が生命をもって聳えていた飛驒山中の原生林の光景が視界を覆い、谷を渡る風の中で樟は神木としての聖性を甦らせるのである。

与吉も与平も、お品もお柳も、同時代社会を動かす思想や体制とは無縁な世界に生きる名もなき人々である。「三尺角」はその意味で、近代文明によって滅びゆく風景の中で、文明を支える論理とは無縁な人々によって、滅びと引き替えに異質な認識の体系が見出されていく物語といつてもよい。「花園」の滅亡と引き替えにするように固有のまなざしを獲得した「化鳥」の母と子もまた、同様の位置を担っている。

だが、一層重要な点は、その異質な認識が、近代科学のように対象を物象化し世界を限りなく分節するのは逆に、異質なものを結び合わせ、統合していく認識の体系だと

いうことである。「幻想」とは、境界を越えて、異質なものを異質のままに結び合わせていく論理でもある。

森鷗外は『めざまし草』の「三尺角」評(明治三十二年一月)で、「この話説の核心とされるは、おろかなる少年の錯視(Illusion)なり」と意味づけた。同時代精神に対してきわめて意識的であった鷗外にあってさえ、そこに「おろかな」錯視を見出さざるを得なかったほどに、鏡花の示した「幻想の論理」は時代を超えて新しくなったというべきだろう。

その続編の位置を担う「木精」は、「三尺角」から二年半後の明治三十四年六月に、「三尺角」との関わりを明示しないまま独立した短篇として発表された。作品集『柳宮』(明治四十二年四月)にも独立作品として収められたが、その後は「三尺角」と並置され、『鏡花全集 第一巻』(明治四十三年一月)では「三尺角拾遺」、春陽堂版・岩波書店版の二種の『鏡花全集』では主題を「三尺角拾遺」、副題を「木精」として収められている。本書では、当初の独立性を考慮し、「木精(三尺角拾遺)」として掲げた。

「三尺角」が「化鳥」の水脈を引き継ぐ自然と人間の関係のドラマだとすれば、「木精」は、その人物設定を受け継ぎながら、恋愛をめぐる怪異譚の趣を呈している。

「三尺角」の末尾でお柳を落胆させた手紙の送り主は、「木精」では工学士とされ、最終的にお柳の死を悼む役回りを与えられている。そこには与吉やお品の影はない。いつてみればこれは、「三尺角」をお柳の願望に寄り添いつつ描き直した物語でもある。

だが、「あわれ、草木も、婦人も、おんな霊魂に姿があるのか」という末尾の一節は、死の間際に靈魂となって男の前に現れた女の姿に、樹木の精霊としての「木精」の姿を寄り添わせる。その構図は、鏡花の「怪異」が、自然をめぐる「幻想」と地続きの地平にあることを物語っている。

自然と人間の関係を描く鏡花文学には数多くの(水の物語)があるが、その一方で、(火の物語)も少なくない。「朱日記」(明治四十四年一月)は、中でも最も印象鮮やかな(火の物語)である。

この物語の背景に、加賀一向一揆にまつわる「高尾の坊主火」の伝承が踏まえられていることについては、藤澤秀幸「泉鏡花『朱日記』論序説——(城下を焼きに参るのぢや)をめぐる」(昭和六十三年六月『国語と国文学』)に詳細に論じられている。城下を焼き尽くした大火についても、宝暦九年(一七五九)の金沢大火が想定されるとする立論は首肯されるが、その上で、これを一篇の幻想小説に仕立て上げた鏡花の想像力の質が

問われなければならない。

そこにまず見出されるのは、浪吉に火事を予告する女と、教頭心得の雑所とが、浪吉を間にはさんで対置する構図である。

小学校を訪れた女の「教師さんのおっしやる事と、私の言う事と、どっちを真個だと思います」という浪吉への問いかけは、「先生のいうことは私を欺すんでも、母様がいつてお聞かせのは、決して違ったことではない」として教師と母を区別する「化鳥」の少年の言葉に似ている。だが「朱日記」では、「先生の言に嘘はありません。けれど私の言う事は真個です」という形で、両者は異なる論理として並立する。一方で雑所は、ひとり火事の予感におびえつつも、「第一然ような迷信は、任として、私等が破つて棄てて遣らなけりや成らんのだろう」という教師の職分を忘れてはいない。

その火事は、自分が「あるものに身を任せれば」起きないはずのものと女自身によって語られる。「殿方の生命は知らず、女の操と云うものは、人にも家にもかえられぬ」という女の一念は、「浪ちゃんが生先生にお聞きなされば、自分の身体は何う成つてなりとも、人も家も焼けないようにするのが道だ、とおっしやるでしょう」と女が語る社会的な倫理としての「道」と、根底から背馳するのである。

ただし、雑所の目に映らなかつたり、井戸側の大石を動かす力をもつことなどからみて、女はむしろ赤合羽の魔人の属する異界の側に——もしくはそれとの境界に——位置する存在とおぼしい。

「草迷宮」(明治四十一年一月)に、主人公葉越明の亡き母の「お知己」と自ら名告り、母の心を思いやりつつ明を見守る異界の女菖蒲が登場する。「貴下のお亡なんなすつた阿母のお友だち」と名告る「朱日記」の女もまた、浪吉の母の思いを背景に、城下を焼く炎から少年一人を守ろうとする。菜莢の実を食べると「貴下のお母さんのような美しい血になる」といい、「紅い木の実を沢山食べて、血の美しく綺麗な兒には、そのかわり、火の粉も桜の露と成つて、美しく降るばかりですよ」と語る女の言葉は、その背後にある母の意志を物語つてもいる。

それはちょうど「龍潭譚」(明治二十九年十一月)で、主人公の少年の亡母のイメージをもつ異界の女を底深く沈めた淵が、洪水の危険を湛えながら少年を庇護する位置にあることとつながる。その遠い延長線上に、自らの恋のために大洪水を起こして北陸七道の人間たちを悉く屠り魚に変える「夜叉ヶ池」(大正二年三月)の主白雪がいる。一方に溯れば、「市」の人々を悉く動植物に変えるまなざしのうちに少年が一人庇護される「化鳥」

の構図に重なるだろう。

\*

「第二崑弱本」(大正三年一月)は、「操」とは無縁な色里の女の一念の物語である。

「崑弱本(莠弱本)」は、半紙四つ折の小型本の形が崑弱に似ていることからきた洒落本の異称である。洒落本とは、遊廓を舞台にした江戸文学の一形式であり、男女の会話と遊びの穿ちを身上とする。鏡花はその形式を借りて、婀娜めいた会話のうちに遊里の女の一念を描いたのである。「第二」としたのは「崑弱本」(大正二年六月)と題する作品がすでにあるからだが、遊里文学という以上の内容の連関はない。

「第二崑弱本」はのつけから、緋の長襦袢で男に逢いに訪れた女の姿を描き出す。かつては遊女であり、のちに芸者になった染次にとって、世間的な意味での操はなにほどの価値ももたない。俊吉と馴染なじみになったあとでも旦那が付いてからは逢うこともなかったように、いわば互いに納得ずくの関係である。その後も狹斜きょうしゃの女の浮き沈みを当然のように甘受して流れるままに生きてきた染次だが、魂は必ずしも身体と共にあるわけではないかのように、その魂は、細くもどこかで俊吉とつながっていた。それぞれの境涯の

中から俊吉に送られる便りは、そのひとすじの糸である。

染次が旦那と別れて再び浅草で芸者になったとき、待合で俊吉が誤って熱い茶を羅うすものの着物の上から染次に浴びせるという出来事は、着物の償いもできないまま染次との逢瀬を避けた男の気弱な身勝手さをよそに、染次の中に俊吉への思いを募らせることになる。上州伊香保の旦那に切り殺される末期のときに俊吉のもとを訪れた染次のまとう緋の長襦袢は、熱い茶を浴びたときの官能の愉楽に似た短刀の痛苦を代償にして、身体の受苦からのがれ出た女の魂の姿である。「第二崑弱本」はその姿を、鮮明な宗教的構図の中に描き出す。

そのとき俊吉の祖母が唱えていた法華経如来寿量品第十六の一節は、釈迦の入滅によって人々の心のうちに生じた仏への渴仰かつうこそが、真の信仰心を生み出すことを説いている。仏の非在が切実な渴仰の源だとすれば、染次の非在はそのまま仏の非在に重ねられる。

鏡花にとって、永遠に喪われたものの「非在」への希求こそが、「もうひとつの實在」の位置を担うのである。

315 解説 「第二崑弱本」が「緋の長襦袢」の物語だとしたら、「革靴の怪」(大正三年二月)は「片

袖の長襦袢」の物語である。「革靴の怪」は単行本収録の際、「片袖」と改題されている。大江良太郎「喜多村緑郎聞書」(「新派、百年の前進」昭和五十三年十月)は、新派俳優高田実からの新作上演の希望に応じて本作が書かれたとするが、その経緯は不明である。一方、「革靴の怪」の後日譚ともいふべき「唄立山心中一曲」(大正九年十二月)で鏡花は、この作品の執筆背景を次のように語っている。

——実はこの時から数えて前々年の秋、おなじ小村さんと、(連がもう一人あった。)三人連で、軽井沢、碓氷のみじを見た汽車の中に、まさしく間違うまい、これに就いた事実があつて、私は、不束ながら、はじめ、淑女画報に、「革靴の怪」後に「片袖。」と改題して、小集の中に編んだ一篇を草した事がある。

ここにいう旅の実際も不明である。「唄立山心中一曲」は、画家の小村雪岱と同道の旅の途中、信州姥捨で出会った鑄掛屋から「革靴の怪」の後日譚を聞く、という趣向である。

古来しばしば女の情意の象徴とされる「袖」だが、「唄立山心中一曲」では、まともにいた体を離れてもお女の魂を留めるものとして描かれている。紫の紋付の袖を自ら引きちぎって片袖だけ緋の長襦袢姿となった花嫁が「半身の紅は、美しき血を以て描いたる煉獄の女精である」と描写されるのは、鞆に残した片袖への夫の嫉妬と執着ゆえに心中に至る、悲劇の予感である。

鏡花が社会の婚姻制度を「残絶、酷絶の刑法」(愛と婚姻)と呼んだことを思えば、花嫁の未来に待ち受ける運命は、たんに寿ぐべきものばかりではない。「革靴の怪」にも、その日のうちに人妻となる花嫁の「今の思は何うおいでなさるだろうとご推察申上げるばかりなのです」という技士の言葉があるように、「プラットフォームで、真黒に、うようよと多人数に取巻かれた」花嫁の行末は、単純に祝すべきものとされてはいない。だが、花嫁が紋付の片袖を引きちぎったときに現れる「襦袢の緋鹿子」の赤は、ここでは「黄金を溶す炎の如き妙義山の錦葉」になぞらえられ、百合若大臣の伝承を背景に、鮮明な意志の発動として鮮やかな美しさで描かれる。そのときむしろ、技士自らいいう「狂乱」の中に浮かび上がるのは、花嫁の片袖とともに技士の「革靴」の中に収められた「身上ありたけ」が物語る、喪われた時間と非在の切実さであるのかもしれない。

「茸の舞姫」(大正七年四月)もまた鏡花生家付近を舞台に想定した作品だが、そこに展

開する光景は尋常ならざる奇矯さに彩られている。

茸に対する鏡花の偏愛は、「雨ばけ」(大正十二年十一月)、「小春の狐」(大正十三年一月)、「木の子説法」(昭和五年九月)などの短篇や随筆「くさびら」(大正十二年六月)にもうかがえる。「化鳥」でも釣人は茸に見立てられ、「清心庵」は茸狩りの場面から始まる。鏡花自身、江戸後期の植物図鑑『本草図譜』(岩崎灌園著、文政十一年(一八二八)成稿、九十六巻から茸類を抄録した「菌譜」(刊年不明)を架蔵していた。「本草」は「朱日記」の雑所や源助の関心事でもある。

この作品が、江戸時代の加賀・越中・能登の伝承を集めた堀麦水編『三州奇談』(成立年未詳)巻之二「幽冥有道」を下敷きしていること、そして作中の祭礼の「やしこば」が金沢に伝わる「弥彦婆」を踏まえることについては、秋山稔「泉鏡花「転成する物語」覚書」(平成二十五年三月「鏡花研究」)に指摘がある。「幽冥有道」は、金沢の医師の息子で「生質魯鈍」である玄俊がある日神隠しに遭い、帰還後にわかにか聡明になったものの、天狗とおぼしき憑きものが離れると元の「愚鈍の人」に戻ったという話である。

同様の神隠しについては、平田篤胤の「仙境異聞」(文政五年(一八二二)に出る少年寅吉の体験談などの先蹤がある。ただし、『仙境異聞』に語られる「仙境」は、篤胤の唱

える復古神道に偏る趣がある。

「茸の舞姫」も鏡花生家近くの久保市乙剣神社を想定した神社の境内を舞台とし、社の祭礼を背景とするが、その祭のハレの時空は、時季が重なった遊廓の祭礼を練り廻つてからやってきた「やしこば」の悪魔払いの儀礼を呼び込み、神道の教義とは明らかに異なる山中の異界をそこに出現させる。

その遊廓には、乙剣神社の対岸、卯辰山麓の東の廓が想定されている。また、東の廓にほど近い卯辰山上の五本松が「峰の天狗松」に想定されるように、異界は、いわば浅野川の対岸から訪れるのである。

天狗による神隠しを体験した空若が、山中の「実家」から持ち帰ったという蜘蛛の巣を「綺麗な衣服」と称して売る縁日商品はいかにもあやしげだが、ほとんど非在に近い蜘蛛の糸の衣は、「小児の時から大人のように、大人になっても小児に斉しい」空若の頑ななまでの疑いなきを背景に、まぎれもない実在として茸の姫や「市」の女たちを呼びよせる。それが廓の祭と同日の出来事であることは、むしろ偶然ではない。

その空間に横溢するエロティシズムは「高野聖」の孤家の女の寝所に夜な夜な動物たちが群がる光景を思い起こさせるが、「茸の舞姫」は、その性差も空間の構造も正確に

反転してみせる。「高野聖」の山中異界が飛驒の原生林の奥に人知れずに存在するのに  
 対し、市中の社の境内に平然と出現するのは、杵若の周囲に群がる自然の精霊のような  
 茸の姫たちと、社会や文化の衣をかなぐり棄てた人間の女たちが織りなす、あけ広げな  
 祝祭の空間である。それはまた、神官や医者が担う社会的権威や、男たちによって形成  
 された「市」とは決定的に背馳する異空間でもある。

山中の仙境を自分が帰属すべき「さと」と杵若が呼ぶように、異なる認識のまなざし  
 の中で、「例の魔だの天狗などというのが居る」「別世界」は、「現世」と地続きの場所  
 に、鮮明なりアリテイを伴って実在するのである。

### 初出一覧

- 「化鳥」明治三十年四月三日「新著月刊」第一号
- 「清心庵」明治三十年七月三日「新著月刊」第四号
- 「三尺角」明治三十二年一月一日「新小説」第四年第一卷
- 「木精(三尺角拾遺)」明治三十四年六月十日「小天地」第一卷第八号
- 「朱日記」明治四十四年一月一日「三田文学」第二卷第一号
- 「第二菟蕪本」大正三年一月一日「新日本」第四卷第一号
- 「革靴の怪」大正三年二月一日「淑女画報」第三卷第二号
- 「茸の舞姫」大正七年四月一日「中外」第二卷第四号

## 〔編集付記〕

一、使用した底本は左記の通りである。

〔化鳥〕——岩波書店版『鏡花全集』第三卷（一九四一年二月）

〔清心庵〕——同前

〔三尺角〕——『同』第四卷（一九四一年三月）

〔木精（三尺角拾遺）〕——同前

〔朱日記〕——『同』第三卷（一九四一年六月）

〔第二莖弱本〕——『同』第一五卷（一九四〇年九月）

〔革靴の怪〕——同前

〔葺の舞姫〕——『同』第一七卷（一九四二年一月）

二、原則として、漢字は新字体に、仮名づかいは現代仮名づかいに改めた。ただし、原文が文語文であるものは旧仮名づかいのままとした。

三、底本はいわゆる総ルビであるが、取捨選択を加えて整理を行い、現代仮名づかいに改めた。

四、〔其（それ・その）〕〔此（これ・この）〕の二字のみ、読みやすさを考慮して平仮名に改めた。平仮名を漢字に変えることは行わなかった。

五、本文中、当時の社会通念に基づき、今日の人権意識に照らして不適切な記述が見られるが、作品の歴史性に鑑み、原文通りとした。

（岩波文庫編集部）

けちょう さんじゃくかく  
化鳥・三尺角 他六篇

2013年11月15日 第1刷発行  
2015年5月15日 第2刷発行

作者 いずみ きょうか  
泉鏡花

発行者 岡本厚

発行所 株式会社 岩波書店  
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111  
文庫編集部 03-5210-4051  
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三秀舎 カバー・精興社 製本・松岳社

ISBN 978-4-00-312718-6 Printed in Japan